

時計とアリストテレス ——前期ハイデガーにおける時間についての一考察——

武 井 徹 也

はじめに

本稿は、M. ハイデガーにおける時間についての現象学的な思惟に即しつつ、時間という現象の一端を考察する。現代を生きる我々は、時計 (watch: Uhr) が示す時間に従って日々の生活を営んでいる。我々は毎日の仕事や用事を時計の時間によって計算し、予定を組み、行動する。日常の我々にとって、「時間」とは時計が示す時間に他ならない。

だがハイデガーは、時計という道具は、「今 (Jetzt)」や「現在 (Gegenwart)」において時間を示すのに特化した時間の計算装置であり、時計を生み出した人間の生それ自身の固有の動性としての根源的時間を本来的に反映したものではないと指摘する。時計に頼って生きる現代人は、「今」に特化した時計の時間のなかに自らの本来的な生と時間の在り方とを埋没させてしまっているというのだ。そしてハイデガーによれば、「今」に特化したこのような時間は、紀元前4世紀の古代ギリシアの哲学者アリストテレスによってはじめて本格的に議論され、今日まで続く時間の理解の伝統的基盤をなしている。「今」に特化した時間理解を原理とする時計という道具と、「今」に特化したアリストテレスによる時間の伝統的な時間理解とが、今日の我々の時間理解を根底から規定しているとハイデガーは考えているのである。

本稿は、1920年代の前期ハイデガーの議論に焦点を合わせ、まず第一節において、時計が示す時間とその特徴についてのハイデガーの分析を確認

する。続いて第二節において、アリストテレスに遡りその時間についての議論を——本稿の主題に関係する範囲において——アリストテレスの言葉に即して検討し、そして第三節では、現存在 (Dasein) として把握された人間の生における時間についてのハイデガーの議論の一端を検討する。最後に第四節において、時計とアリストテレスとにみられる時間理解をハイデガーの議論の視座から再考することを通じて、「時間」という現象についての知の可能性を考察してみたい⁽¹⁾。

1. 時計が示す時間とその特徴

時を知ることは、古代より人間の生活において大きな関心事であった。例えば天体の運行（そしてそれによってもたらされる昼や夜の事象）などは、人間の生活行動を規定する最も基本的な要素であり、そこから人間の生活行動（働くことや休むことなど）のための時間が読み取られる。時間は人間の生との関係から、言い換えれば人間の生の在り方に即して理解される。そして時計という道具——その様式は多々あるが——は、人間の生活行動を整えようとする時間理解に即して人間の生が生み出した時間の計算装置であり、この世界の様々な〈事物の運動〉を計測し、時間という現象を〈数量〉において均等・正確に示す装置である。

それゆえ我々は日常的に、時計は「時間」という現象を適確に表示する道具として受容している。しかし時計が示す時間は、はたして時間という現

象をその本来の性格において示しているのであろうか。また時計が示す時間にはどのような特徴があるのであろうか。

ハイデガーは、人間の生の在り方を「現存在 (Dasein)」という術語において捉え、時計が示す時間は現存在の日常的な在り方——日常性 (Alltäglichkeit)——が反映した時間であると考ええる。ハイデガーは、1925年におこなった講演において、現存在の日常性と時計との関係について以下のようにいっている。

〔現存在の〕日常性において、時間 (Zeit) はどのように現に存在しているのであろうか。それは明らかに、私が時間について何ごとかを決定し、時間について規定する場合、すなわち、私が時計 (Uhr) に目をやり、今 (Jetzt) と言う場合〔に現に存在しているの〕である (Ka, 169)。

ハイデガーによれば、人間の生の日常的な在り方においては、時間という現象は時計という道具を基準として捉えられている。しかも我々が時計をみるのは、今がどのくらいの時間なのか（すなわち、今は何時なのかという時刻）を知るためである。こうした時計の時間は日々の生活を営む我々の日常的な時間理解を体現している。ではそもそも時計という道具はなぜ作られたのであろうか。ハイデガーはこのようにいう。

時計が存在するのはなぜか。それは〔現存在の〕日常性が世界 (Welt) の動きを今において意のままにしたいがためである。今は、その後は、その後は、その後は……とひたすらに続く今。……〔中略〕……このような今一般を手に入れるために、時計が必要なのである (Ka, 170)⁽²⁾。

ハイデガーによれば、時計とは時間を「今」という時間の相において示すのに特化した時間の計算装置である。しかもこの「今」とは、日常的な現存在による生の営みがなされるそのつどの「今 (Jetzt)」である。我々は日常的にそのつどの今に立脚し、そのつどの今において直面する物事への仕事や用事を果たしながら生きる。次々に生じてくる「今」という時間相を時計という道具を用いて把握することで、日常的な我々はこの世界を我々の意のままに掌握することができ、日々の営みを成立させられ得るとハイデガーは考えているのである。我々は「今」において世界に関わり、他者と交わり、自己の生を営んでいるのであり、時計はこうした「今一般」を我々に適確にもたらししてくれるのだ。

しかし、このような時計が示す時間——「今」が突出した時間——とは、時間として偏った時間の現象なのではないだろうか。ハイデガーは、このような時計の時間は、人間の生それ自身、すなわち現存在それ自身の〈生の固有の動性〉としての根源的な時間ではなく、その本来的な時間を体現したものではないと指摘する。

日常的な現存在がお互いに対する配慮的な気遣いに没頭すればするほど、それだけますます日常的な現存在のもつ時間は少なくなり、暇が減り、それだけますます時計は精巧になっていく。……〔中略〕……〔現存在が〕本来的に時間的に存在することとは、〔このような〕時間のなかで行動したり、時間を計算に入れたりするということなのではない。時計を使うということは、あらゆる時間を現在に仕立て上げる (zur Gegenwart machen) ということを意味する (Ka, 170f.)。

「今」という時間相を時計という道具を使って手中に収めることで、日常的な我々はこの世界を我々

の意のままに掌握することができ、互いに関わり合いながら日々の営みを成立させられる。しかしハイデガーによれば、このような時計の時間は、現存在が本来的にもっており、それを生きるはずの本来的な時間とは全く異なっている。さらにハイデガーは、次のようにいう。

そこには、我々が時計を使用するのは、自然(Natur)の出来事を客観的に規定するためである、ということが浮き彫りになってくる。現存在は時計を使って世界を規定しようと試みている。なぜ現存在は時計の時間(Uhr-Zeit)で世界を規定するのであろうか。自然科学において測定されるのはどのような時間なのであろうか。時計という周期的な計算装置を使用することにはどのような意味があるのであろうか。それは今を捉えるための可能性を用意することである。しかしこのようにすることによって生は、それ自身が本来的に自らそれである時間に対する感覚をなくしてしまう(Ka, 171)。

日常的な現存在はまた、自然科学などにおいて世界(自然)を〈客観的に〉規定し知るために時計を用いる。なぜであろうか。それは時計とはこの世界の〈事物の運動〉を計測し、時間という現象を〈数量〉において均等・正確に示し得る装置であり、「時間」という現象それ自身を適確に示すものであるという理解があるからであり、またそれゆえに万物の〈公的な時間〉を示すものであるとみなす傾向があるからであるとハイデガーはいう。しかしこれまでみてきたように、時計が示す時間の特徴は、「今」や「現在」という時間の相への特化にあり、ハイデガーはこのような時計の時間は、時計という道具を生み出した人間の生の根源的な時間——本来的な時間——を隠蔽しているものとみている。日常的な現存在が依存している

時計の時間は、我々の生活に便利や効率をもたらす一方で、現存在それ自身の生の固有の動性としての根源的な時間を蔽い隠してしまっているとされるのである。

2. アリストテレスにおける時間についての議論

本節では、古代ギリシアのアリストテレスに遡って、本稿の主題に関係する範囲においてその時間論を検討していく。ハイデガーは、時間に関する史上はじめての本格的な議論をアリストテレスの思惟にみる。そしてハイデガーによれば、アリストテレスの時間理解は、実は時計が示す時間と同様の性格をもっているとされる。このようなアリストテレスの時間についての議論が、今日まで続く伝統的な時間理解、我々の日常的な時間理解の基礎をなしているとハイデガーは考えるのだ(vgl. GA24, 329)⁽³⁾。しかし本節ではひとまず、ハイデガー自身の解釈は脇に置いておいて、アリストテレスによる時間についての議論をアリストテレス自身の言葉に即して検討してみたい。ではアリストテレスの時間理解とはどのようなものなのであろうか。

アリストテレスは『自然学』Δ巻(第4巻)などにおいて、時間についての詳細な議論を展開しているが、そこでは時間は次のようにいわれている。

時間(χρόνος)とは、〔事物の〕運動(κίνησις)ではないが、〔事物の〕運動なしには存在しないことは明らかである。……〔中略〕……しかるに、時間は運動ではないのであるから、それは運動の何か(κινήσεώς τι)であることは必然である(Physica, 219a 1-10)⁽⁴⁾。

時間は、運動の何らかの様態である(Physica, 251b27-28; vgl. Metaphysica, 1071b10)。

アリストテレスによる時間論の特徴の一つは、時間という現象を事物（πρᾶγμα）の運動（κίνησις）との関係において——世界における事物の運動（生成・消滅・増大・減少・変化・移動）を計測・認識することのうちで——常に議論していることにある。続けて彼はこのようにいう。

時間とはまさに、より前とより後とに関しての運動の数（ἀριθμὸς κινήσεως κατὰ τὸ πρότερον καὶ ὕστερον）である（*Physica*, 219b 1-2）。

時間とは運動ではなく、数をもつ限りでの運動である（*Physica*, 219b 2-3）。

アリストテレスにとって、時間は事物の運動との関係において捉えられるが、それは運動の数量として、数（ἀριθμός）や距離などという数学的な概念に即しながら捉えられているという特徴をもつ。時間は数それ自身ではなく、数によって「数えられる」ものなのである（*Physica*, 219b 5-9）。そしてアリストテレスは、「時間は運動の尺度（μέτρον）である」という（*Physica*, 221b 7）。「より前とより後とに関しての運動の数（ἀριθμὸς κινήσεως）」という時間の規定は、事物の運動のより前とより後とにおける運動の数量として計測・認識することによる時間の把握なのである⁽⁵⁾。

ところでここで注意しなければならないのは、アリストテレスのいう「今（τὸ νῦν）」がもっている性格である。すなわち彼によれば、時間は「今」において捉えられるのであるが、その際、「今」は時間上の「複数の今（τὰ νῦν）」を意味し得る。時間という現象は、事物の運動における「より前の今」と事物の運動における後である「より後の今」という今の局面の比較によって、「時間が経った（γεγονέναι χρόνον）」という連続性において認識される（vgl. *Physica*, 219a20-30）。時間の現象は、このように事物の運動のより前とより後とを

識別することのうちではじめて我々に示されるのだ。

これら両端〔＝より前とより後〕を中間とは異なるものであると我々が思惟し、今（τὸ νῦν）が二つあると、すなわちより前の今とより後の今との二つあると魂がいうとき、そのときにそれが時間であると我々はいうのである。なぜなら、今において境界付けられるものが時間であると思われるからである（*Physica*, 219a26-30）。

時間を境界付けるものがこれ〔＝今〕であり、複数の今（τὰ νῦν）の中間が時間である（*Physica*, 237a 5-6）。

またこのような「今」というものをよくみると、そもそも「今」とは常に移り行くそのつどの「今」という瞬間であって、各々の「今」はまさに「今」という相としては同一であるが、しかし全く同じ「今」ではなく、そのつど生じるそれぞれ異なる「今」であるという性格をそなえていることがわかる。ここには「今」というものが抱えている同一性と差異性とが存している（vgl. *Physica*, 219b 9-15）⁽⁶⁾。

今は、まさにその当のものとしては同じものであるが、その在り方は異なる。そしてこの今が、より前とより後とにおける時間を計るのである（*Physica*, 219b10-12）。

今は、移動しているものが常に運動しているがゆえに、常に異なる（*Physica*, 220a14）。

従ってこのような時間の議論は、例えば「将来」と「今」と「過去」とを時間における既定の三つの区分とみなした上で、それらを総合した現象と

して時間を理解するものではない。アリストテレスは、時間は今によって連続的であるとともに、今において分割される (*Physica*, 220a 4-5) といひ、また時間は分割して思惟することは可能であるが、時間それ自身としては分割されないものであると述べている (vgl. *De Anima*, 430b16-18)。また「今」は、線に対する点 (στιγμή) に似ているところがあるとしながらも、「今とは時間の部分ではない」として、そのつどの「今」という瞬間はあらかじめ設定された時間上の一区分ではないとする (*Physica*, 220a 9-20)。アリストテレスにおいて、時間という現象はそのつどの「今」という瞬間を基準として連続した現象と理解されるのである。

我々はより前とより後ということを、今からの距離に応じていい、そして今は、過去の時間と将来の時間との境界 (ὄρος) である (*Physica*, 223a 5-6)。

今とは…… [中略] ……時間の連続である。というのは、今は過ぎ去らんとしている時間と来らんとしている時間とを結び付けているからであり、また時間の限界 (πέρας) であるからである。というのは、今は時間 [= 来らんとしている時間] の始まりであり、時間 [= 過ぎ去らんとしている時間] の終わりであるからである (*Physica*, 222a10-13)。

今とは何らかの中間性 (μεσότης) であって、始まりと終わりとを、つまり来らんとしている時間の始まりと過ぎ去らんとしているの終わりとを一緒に結び付けているなら、時間は常に存在することは必然である。…… [中略] ……従って、今は始まりでありまた終わりであるからには、その両方の側に時間が常に存在することは必然である (*Physica*, 251b20-26)。

こうした「今」は、過ぎ去った時間 (過去) と来らんとする時間 (将来) とを連続する時間としてそのうちにもっている。アリストテレスは、「時間が連続的であるのは、実に今によってであり、また時間が分割されるのも今においてである」とし (*Physica*, 220a 4-5)、また「時間が存在しなければ、より前やより後ということも存在しない」 (*Metaphysica*, 1071a 8-9 ; vgl. *Physica*, 251b10-11) という。それゆえこのようなそのつどの「今」という瞬間は、そこから過去の時間と将来の時間とが分かれる「境界 (ὄρος)」をなしており、またそこにおいて時間という連続する現象が過ぎ去って終わりまた同時に到来して始まる「時間の限界 (πέρας)」をなしているのである。

このように、これまでみてきたアリストテレスのいう「今」は、人間による時間把握の仕方と密接な関係をもっている。アリストテレスはこのようにいう。

もし魂 (ψυχή) や魂の理性 (νοῦς) のほかに、本性上数えるものが何も存在しないとすれば、魂が存在しない限り、時間が存在することは不可能であろう (*Physica*, 223a25-26)。

時間は、今なしには、存在することも思惟することも不可能である (*Physica*, 251b19-20)。

アリストテレスは、事物とその運動は人間などの魂 (ψυχή) がなくとも存在するが、事物の運動の数としての時間は魂や魂の理性において把握される限りで存在し得るといっている。ただしそれは、時間とは〈主観的なもの〉であるということではないだろう。アリストテレスの主張は、数とは数えるものが存在しなければ、数もまた存在しないという数についての彼の理解 (*Physica*, 223a22-25) に基づいている。そして時間は、先にみたように、事物運動における「今」において理

解される。事物の運動の前後が認識されることによってはじめて、時間というものが存在していることが知られる。アリストテレスは、「もし時間が存在しないならば、今は存在せず、今が存在しないならば、時間は存在しない」という (*Physica*, 219b33-220a 1)。時間とは、我々が時間という現象を認識する「今」において我々に現われるものなのである⁽⁷⁾。

3. ハイデガーにおける時間についての議論

第一節でみたハイデガーの議論において、我々が日常、「時間」として理解している時計の時間が、人間の生の動性としての根源的時間を本来的に体现するものではないことが示唆された。ハイデガーによれば、このような時間は不断の「今」や「現在」の平板な継起としての時間であり、それは現存在それ自身の根源的な存在可能性に関係した本来的な時間ではなく、現存在がこの世界において様々な物事と関わり合う今を基準にした時間なのである。そしてこのことは、第二節でみてきたアリストテレスの時間理解についてもあてはまるとハイデガーは考えている。

そして、日常的な場面において時間は、世界の様々な〈事物の運動〉を計測し、時間を〈数量〉において均等・正確に示す道具である時計において捉えられるものとみなされているが、前節で示されたように、ハイデガーはそのような時間でさえも人間の〈生の動性〉としての根源的な時間に基づいていると考えている。では、ハイデガーにおいて、人間の生の時間はどのようなものなのであろうか。本節では、本稿の主題に関係する範囲においてその議論のごく一端を検討していきたい⁽⁸⁾。

ハイデガーは第一節で取りあげた1925年の講演において、現存在という存在者の根本性格は「可能性 (Möglichkeit)」であるという。我々一人一

人は、己の生が元来もっている様々な存在可能性をそのつど選択しながら、己自身が未だそれではない在り方へ向かって己を投じながら生きている (Ka, 168f.)。すなわち、我々は己を生きていく決意のもと、己の生の様々な存在可能性のうちの或る可能性を責任とともに選択しながら生きている。ハイデガーはこのようにして己を先んじて投じながら生きる現存在の在り方を「先駆 (Vorlaufen)」と述語化する。我々は先駆することによって、自ら己の「将来 (Zukunft)」を存在する。つまり己の将来という時間を存在することになるのである。

またこのように、己自身が未だそれではないところのものへ向かって己を投じながら生きることは、己がかつて在った「過去 (Vergangenheit)」とともに生きることを意味するとハイデガーはいう (Ka, 169)。すなわち、我々は己自身が未だそれではないところのものになろうとすることで、己の過去を引き受け、新たな己になろうとする。ここでは我々は自ら己の過去を存在する、つまり己の過去という時間を存在することになるのだ。そしてハイデガーは、このように己の将来と過去とを存在することによって、現存在は本来的に「現在 (Gegenwart)」のうちに、すなわち、そのつどの現在の生の行動のうちにいたるというのである。ハイデガーはこれらのことを次のようにまとめている。

現存在は決意している在り方のうちで己の将来を存在し、負い目あること (schuldig) のうちで [= 己の生のうちの或る存在可能性を責任とともに選択しながら生きるうちで] 己の過去を存在し、行動するうちで現在にいたる (Ka, 169)。

現存在は、そのつどの今という或る瞬間 (Moment) において存在しているだけではない。現存在は己の様々な可能性と己の過去と

のあいだに張られた糸全体のうちで存在している。不思議なことであるが、将来へ向かって行動するうちで、過去は生き返り、現在は消える。本来的に行動するのは、将来から生きる人々である。このような人々は過去から生きることができ、現在は自ずとつくられる。時間は私の現存在の全体性を構成し、同時にそのつどの瞬間において私の本来的な存在を構成している (Ka, ebd.)。

現存在はこのようにして、将来、過去、そして現在を自らの生から、自らの生の在り方として展開しながら生きているのだ。ハイデガーによれば、時間とは人間の外部世界に存在するような或る客観的なものではない。時間とは、我々が自ら存在している現象であり、現存在の全体を規定している現象である。言い換えれば、人間の生は時間のうちに存在するのではなく、現存在という存在それ自身が時間であるのだ。そして本来的な時間とは、「今」や「現在」という時間の相を中心とした現象ではなく、己の生の可能性の「将来」へ向かって決意して生きることが己の生の「過去」を生き返らせ、それによってそのつどの己の生の瞬間である「現在」がおのずと生起するような全体的な現象なのである。

時間とは根源的には、人間がそのつど己として存在しようとする〈生の動性〉であり、そのような時間は、この世界の様々な〈事物の運動〉を計測し、時間の現象を〈数量〉において均等・正確に示す時計にみられる時間理解、つまり「今」や「現在」という時間相に特化した時間理解によって十分に把握され得ない、これがハイデガーの基本的な主張である。ハイデガーによれば、「現在」や「今」という時間相は、上にみたような「将来」や「過去」という時間相と密接に関連しており、このような「将来」と「過去」とのはざまに生じる瞬間的な時間相なのである。

これらのことを1925年の講演の2年後、1927年に公刊された『存在と時間』においてもみてみよう。周知のように、彼は前半のみ公刊されたこの未完の主著において、存在者 (Seiendes) との関わり合いのうちで我々現存在が常に既に了解している「存在 (Sein)」という現象を主題として問いつつその様々な意味を解明しようとしたのであるが、その議論の始点として現存在それ自身の存在構造 (実存論的な構造) を詳細に分析している。そしてハイデガーは、現存在それ自身の時間的性格を「時間性 (Zeitlichkeit)」と規定し、その本来的な在り方を次のようにいう。

決意性は将来的に己へ帰来しつつ、現前しながら状況のうちへそれ自身をもたらす。既往性は将来から発源し、しかも既往的な (よりの確にいえば、既往しつつある) 将来が、それ自身のうちから現在を放出する。このように既往しつつ—現前している将来 (gewesend-genenwärtigende Zukunft) として統一的な現象を、我々は時間性と名付ける (GA2, 432)。

この引用文は難解な表現であるが、ここでは先の講演に比べて現存在の時間性がより原理的に語られている。すなわち、己の様々な存在可能性の「将来 (Zukunft)」——原義: 来るものへのもとへ (zu künftig) ——へ向かって己を先んじて投じる決意をして生きんとする現存在の先駆的な決意性によって、〈己が元来、生の様々な存在可能性をもっている現存在へと常に既に投げ出されている事実、つまり己がなぜ人間として生きる (実存する) ことになったのかの理由も知らずにこの世界に常に既に投げ出されているという事実〉が明確に意識される (GA2, 430f.)。そしてこのような己の「被投性 (Geworfenheit)」を自覚して引き受けることは、己の生がそのつど既に或る己の生であった在り方としての「既往性 (Gewesenheit)」——

ここでハイデガーは、現存在それ自身の存在としての時間をより厳密に分析するために「過去」という語は使わない——を存在するという仕方でも可能となるという。ハイデガーによれば、こうした仕方でも存在することによってのみ、己の存在可能性の「将来」へ向かって己を先んじて投じつつ生きることは、現存在が「既往性」から己に帰り来る（zurück-kommen）という仕方でも己自身に将来的に到来するというのである（GA2, 431）。

それゆえここでは「現在」は、「将来と既往性のうちに包み入れられている」（GA2, 434）。というのも、現在とは、己の可能性の「将来」へ向かってそのつど決意して生きるなかで、既往しつつある将来それ自身のうちからそのつどの瞬間として生起するものだからである。ハイデガーは、このようにしてそのつどの現在の生——己が己自身を生きる覚悟をもって物事に関わり合う瞬間——は将来と既往性によっておのずと定まると考えるのである。

このように『存在と時間』のハイデガーによれば、時間とは「将来（Zukunft）」と「既往性（Gewesenheit）」と本来的な「現在（Gegenwart）」——すなわちそのつど己の在り方を決意して生きる生の「瞬間（Augenblick）」——とが統一体をなしている現象である。そして時間の根源的な相は己が何者かにならんとする「将来」にあり、この将来から各々の時間相が全体的・統一的な時間現象として生起するのである（ハイデガーはこれを「時熟・時間化（Zeitigung）」（GA2, 434f.）と規定する）。だからこのような時間は、様々なものから切り離されたいわゆる〈純粹時間〉などではなく、現存在という具体的な実存において、その在り方として成立し得る時間である。

しかしながらハイデガーは、このような時間の統一的現象は現存在の本来的な時間性であり、本来的な時間性ではない日常的な時間性——非本来的な時間性——にあっては時間の現象は異なると

いう。そこにおいては、関わり合う物事についての仕事や用事の予定からみられた将来としての「予期（Gewärtigen）」と、仕事や用事が済むことで忘れ去られる過去としての「忘却（Vergessen）」とが、そのつどの仕事や用事をこなすことにおける「現在（Gegenwart）」——すなわちそのつど仕事や用事をこなす不断で平板な今としての「今—時間（Jetzt-Zeit）」——と統一体をなすとされる（GA2, 447ff.）。ハイデガーによれば、こうした時間の非本来的な統一的現象においては、時間の根源的な相は物事に対処し取りかかっている「今」や「現在」にあり、時間という現象は「今」や「現在」という時間相から理解されることになるのである。それゆえ日常的な時間は、「始めも終わりもない純粹な今の継続」（GA2, 435）であり、ハイデガーはこれを本来的な時間性から派生したものの時間性の一つの様式として分析するのである。このことは次のように表現される。

通俗的〔＝日常的〕時間概念の特徴は、時間は今から理解されることにある。今と相關して、残りの時間性格、つまり過去と将来とが規定される。すなわち、過去はもはや—ない—今として、将来は未だ—ない—今として規定される限りは、今は通俗的時間理解において優越した役割を果たしている（GA21, 244）。

また1925年の講演では、このような非本来的な時間の現象が時計との関係において言及されている。

〔現存在の〕日常性は常に現在のうちに生きており、現在を見越して将来は計算され、また過去は忘却される。現在のうちに身を置き続けるといふこのような傾向が、時計が存在するようになった原因である（Ka, 170）。

時計という時間の計算装置は、日常的な現存在の時間性（非本来的な時間性）と密接に関係しており、非本来的な時間性における時間の理解から生み出され、その時間理解を体現している道具である。時計はそのつどの「今」を基準とし、将来を未だ来ない「今」、過去をもはや過ぎ去った「今」として表示する。これによって時間の現象は不断の「今」の平板な継起とみなされる。しかしこのような時間は、生の固有の動性としての根源的時間ではなく、己がこの世界において関わり合う物事への仕事の今を基準にしている時間なのである。

4. 時計とアリストテレスにおける時間と、ハイデガーにおける時間

さて、ここまで時計が示す時間の特徴、アリストテレスにおける時間についての議論、ハイデガーにおける時間についての議論をみてきた。本節では、これまでの議論をまとめつつ、ハイデガーの議論に即しながら「時間」という現象について考察してみたい。これまでの議論からみてとれるように、ハイデガーの見解に従うならば、時計やアリストテレスにみられる時間の理解は日常的な現存在の非本来的な時間性に属する理解ということになる。なぜならハイデガーによれば、時計やアリストテレスの時間は、この世界の様々な〈事物の運動〉を計測し、時間という現象を〈数量〉において捉える時間、すなわち「今」を基準として不断の「今」や「現在」の平板な継起からみられた時間であり、それは己の存在可能性に関係する人間の〈生の動性〉としての根源的な時間ではなく、人間が世界（自然）において関わり合う物事への仕事や用事の今を基準にみられた時間だからである。

このように時計の時間のみならず、アリストテレスによる時間の議論も「今」を基準とした時間の理解であるとされる。第二節でみたように、ア

リストテレスは『自然学』Δ巻などにおいて史上初の本格的な「時間」についての議論を展開しているが、ハイデガーによれば、そこでは実際には我々が時計に目をやるときに把握されるような時間、つまり「時刻」に即して時間という現象が議論されているとされるのである。

通俗的〔＝日常的〕時間理解についての最初の伝承された、詳細で主題的な解釈は、アリストテレスの『自然学』のうちに、すなわち自然についての存在論という「問題」連関のうちに見出される。そこでは「時間」は、「場所」や「運動」と一緒に並立している（GA2, 565f.）。

アリストテレスがはじめてそしてその後長い間にわたって、通俗的な〔＝日常的な〕時間概念を明確に概念にもたらし、その結果、彼の時間についての見解は自然的な時間概念に対応している（GA24, 329）。

アリストテレスの時間の定義は、我々が時間と名付けているものがどのように近づき得るようになるかを限界付けることによって、時間を性格付ける。アリストテレスによる時間の定義は、或るひとつの接近の定義、もしくは接近の性格付けである。……〔中略〕……アリストテレス自身は、時計の使用を解釈しておらず、時計の使用には一度も言及していないが、時計による時間への自然的な接近の仕方を前提にしている（GA24, 362f.）^⑨。

さらにハイデガーは、このような時計やアリストテレスにみられる時間理解の特徴について次のように指摘する。

時間が、世界、自然、創造された存在者と連

関してみられる場合、それは今－時間（Jetzt-Zeit）として理解されている。すると時間的とは、「時間のうちへと」落ち込みつつ、「時間のうちに」流れ行きつつ、という謂いである（GA21, 249）。

このような時間理解においては、時間は世界における〈公的な現象〉としてみなされ、世界の事物や物事はこうした〈時間のうちに〉存在しているものと捉えられる。実際、アリストテレスはこのようなにいつている。

あらゆる転化、およびあらゆる運動するものは、時間のうちに（ἐν χρόνῳ）存在する（*Physica*, 222b30-31）。

〔事物は〕時間のうちに生成し、消滅し、増大し、変化し、移動する（*Physica*, 223a30-32）。

運動することは、時間のうちでなければ不可能である（*Ethica Nicomachea*, 1174b 8）。

世界の事物や物事は〈時間のうちに〉存在するものとして捉えられ得るが、しかしこれまでみてきたアリストテレスやハイデガーの議論によるならば、そもそも時間それ自身は魂や人間の生を離れては存在し得ない。ハイデガーは、「時間は、世界の出来事の枠組みとして外部のどこからか現われるものではない」という（GA20, 442）。ハイデガーは『存在と時間』などにおいて、事物や物事が〈時間のうちに〉存在するこのような時間的規定性を「内時性（Innerzeitlichkeit）」（GA2, 440, GA24, 334）として規定する。確かに事物や物事は、〈時間のうちに〉存在するものとして我々に出会われ、そのつどの今において関わり合いの対象となる。それは人間の生の本来的な時間性におい

ても、また非本来的な時間性においても同様である。だが時計やアリストテレスの場合、世界の事物や物事がこうした〈時間のうちに〉存在するという理解が自明視され、それを支えている根源的な時間、すなわち生の動性としての現存在の時間性は隠蔽されてしまっている。我々現存在の存在が時間であるがゆえに、事物や物事がその〈時間のうちに〉存在するものとして出会われ得るのだ。「我々が空間的・時間的に規定する自然の運動は、蝶番の「なかで」行なわれるように「時間のなかで」経過するのではない。……〔中略〕……こうした運動は、我々自身がそれである時間の「うちに」入って出会われるのである」（GA20, 442）。

このような不断に到来し過ぎ去っていく「今」を基準としてみられた時間、不断の「今」や「現在」の平板な継起からみられた時間、万物をそのうちに包みこんでいる〈公的な時間〉、こうした時間の理解とは、実は日常的な現存在の非本来的な時間性の産物である、というのがハイデガーの主張である。ハイデガーはこのような時間の理解は、時計という時間の計算装置の原理であり、アリストテレスによって詳細に議論され、時計が示す時間に従って毎日を生きる我々現代人の時間理解となっていると考えるのである。

こうした分析を踏まえて、ハイデガーは時間の学問的考察について次のように指摘する。

歴史以外や様々な自然のなりゆきも「時間を通して」規定されるのであれば、「そのうちで」出会われる存在者が出会われる「ところ」の時間は、なおさら必然的に根本から率直な分析に値する。しかしながら、歴史と自然についての諸科学においては、「時間の因子」が現われてくるという事情よりも一層基本的なことは、現存在が一切の主題的探究に先立って既に「時間を見計らっており」、時間^に則^って^いるという事実である。そしてこの事実

においてまたも決定的なことは、現存在が「己の時間を見計らい考慮に入れている」ということであり、そのことが時間を明確に規定することを目指してつくられている測定器具〔＝時計〕の一切の使用に先立ってある。前者が後者に先行しており、そして様々な時計の使用ということをはじめて可能にしている (GA2, 534)。

ハイデガーによれば、この世界の〈事物の運動〉に定位して数量的な時間を論じたアリストテレスの議論が時間理解の伝統的基盤となり、今日の日常的な時間理解の基礎をなしている。そして時計という道具もまた同様の時間理解に即して生み出され、我々に「時間」というものを端的に示している。時計はすべて——日時計や水時計、また機械式時計やクォーツ時計や原子時計にいたるまで——この世界の様々な〈事物の運動〉を計測し、時間という現象を〈数量〉において均等・正確に表示する時間の計算装置として作られているのだ。従って時間に関係する事象を学問的に考察する際に重要なことは、このような日常的な現存在の特定の非本来的な時間性に由来する時計の時間を前提にすることではないとハイデガーは考える。ハイデガーは、時間に関係しているあらゆる研究（自然科学や歴史学などの諸科学の研究）は、実際は現存在の存在可能性に関する〈生の動性〉としての根源的時間に常に既にに基づいているのであり、それゆえに現存在における生の根本運動としての時間性の分析を踏まえなければならないと主張するのだ。さらにハイデガーは時計についてこのようにいう。

時計それ自身のうちに時間は存在しないが、しかし「今」と言うことによって、我々は時間を前もって与えており、そして時計は我々に今がどれくらいかを与えている (GA24,

348)。

ハイデガーによれば、時計の示す時間は、「今—時間」として現存在の非本来的な時間性に基づいている。それゆえこの「今—時間」における時間の理解が時計という道具の原理であることになる。ここでいう時計の原理とは、例えば機械式時計におけるゼンマイや歯車の作動原理やクォーツ時計における水晶の振動原理などといった物理的・物質的な原理ではなく、そのような物質を組み上げて時計という時間の計算装置を形成している人間の時間理解そのものを指している。それゆえこのような原理は、ハイデガーの分析に従えば、現存在の非本来的な時間性に立ち返ることでその性格がはじめて明確に捉えられ得るのだ。

このように、ハイデガーによれば、時計という時間の計算装置の原理をなす時間理解は、時間についての本格的な議論の端緒であるアリストテレスによる伝統的な時間の理解とともに、今日の我々が日常的に無自覚のうちに従っている時間理解である。我々は日常的に、人間の生の動性としての根源的な時間を——その自覚がないまま——隠蔽しており、時計が示す時間に埋没して生きているとハイデガーはいうのである。それゆえ我々はこうした時間理解のうちに常に既に生きており、それゆえに日常生活において「時間」について主題的に問うことはまずない。時計が「時間」というものを教えてくれると考えるからである。

時計のこの計測〔＝時計における時間の表示〕は、我々にとって極めて自明なものとなってしまうので、我々は時計をみるとき、いかなる諸前提の世界がそのなかに横たわっているのかに全く気が付かない (GA27, 189)。

しかしハイデガーの時間についての議論は、人間の生の在り方を深く掘り下げることで、時間と

いう現象をより深く、多角的に考察するための一つの視座を提供してくれる。彼によれば、時間が示す時間という一見、自明であるようにみえる現象は、日常的には、特定の理解様式と歴史の産物として我々の前に現われているのだ。

さらにこうしたハイデガーの思惟は、「時間の起源」という問題にも迫る。ハイデガーによれば、アリストテレスの時間理解はアリストテレス自身の生の解釈に表立たずに基づいているのであるが、アリストテレスはそのことを意識していなかったという (GA2, 556)。実際、「時間の起源」という問題はアリストテレスにおいて議論されることはない。しかし既にみてきたように、ハイデガーは時計やアリストテレスのようにこの世界の事物の運動に定位するのではなく、人間の生に定位して時間を分析することで生の根本的な動性（現存在の時間性）を根源的な時間として思惟し、そこに時間の在処、時間の起源を見出しているのである⁽¹⁰⁾。

それゆえこのようなハイデガーの議論の視座から考察されるべきは、日常的な時間理解を人間の生の時間性に遡って明らかにすること、そしてそれを人間の生の本来の動性である本来の時間性と比較検討することで、時間についての新たな知を探究することである。ここから我々の日常的な時間理解を照明し、その射程や可能性を詳細に見定めること——その時間理解の性格を明確に確認すること——は、我々に時間についての新たな知の可能性を拓く一歩となり得ると思われるのである。

しかしながら、そこには幾つかの大きな問題がある。第一に、ハイデガーの議論においては、我々の日常において、人間の存在可能性に関する〈生の動性〉としての根源的な時間それ自身が、いかにして世界の〈事物の運動〉における〈数量〉としての時間としても現象するようになるかが問題となる。しかもハイデガーによれば、後者の時間

理解は前者の本来の時間性から派生した時間性に基づいている時間理解と位置付けられる⁽¹¹⁾。だがはたしてそのように言い切れるのであろうか。中島義道は、ハイデガーのこのような人間の〈生の動性〉としての時間について、それは「時間の純粹形態」などではなく、「ある独特の状態における心の状態にすぎない」と批判する⁽¹²⁾。また現象学者のクラウス・ヘルトは日本で行なわれた講演において、数において示される時間を非本来的な時間とするハイデガーの分析を、古代ギリシア哲学における時間理解についての詳細な分析を通じた解釈を示すことで批判しようとしている⁽¹³⁾。

第二にそもそも、アリストテレスのいう「今 (τὸ νῦν)」は、ハイデガーのいう「今 (Jetzt)」または「現在 (Gegenwart)」と同じ事象といい得るのかという問題、つまり両者の時間についての議論の内実——とハイデガーのアリストテレス解釈の正当性——に関係する重大な問題が存在する。アリストテレスは、「今は限界である限り、時間ではなくて時間に付帯するものである」という (*Physica*, 220a21-22)。連続性こそが時間の性格であって、人間の時間把握に関係した同一性と差異性とを有するそのつどの「今」という瞬間は連続性をもたない。この限り、アリストテレスは「今」を「時間」やその特定の相とはみなしていないように思われる。一方、ハイデガーは「アリストテレスにとって時間の根本現象は νῦν [=今] (218a6) である」と解釈し、「彼はここ [=今] に [時間の] 一定の基礎付けのための結び付きをみている」と解釈する (GA22, 202f., 326)。また現存在の時間性の分析に基づいた時間理解において、「現在」を時間という現象を構成している特定の相として理解している。このような「今」と「時間」との関係はより広い観点から整合的に理解し得ないのであろうか。しかしアリストテレスもハイデガーも、この点に関する明確な議論を示していない。

おわりに

1920年代のハイデガーによる時間についての議論は、独自の興味深い洞察をもつものであるが、本稿ではその主題に合わせて、そのごく一端を検討したに過ぎない。しかも第四節の最後にも触れたように、彼による時間の分析は完遂されたものではなく、多くの課題・問題が残されたままになっている。

このようなことがらをより立ち入って考察することは、本稿の域を超えることになる。だが本稿での考察によって、「時間」という謎の多い現象の一端を照明することができたとしたら、本稿はその役割を果たしたといえるだろう。

註

・ハイデガーの著作は、ハイデガー全集（Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, 1975-）に収録されている公刊著作や講義録や講演原稿の他、全集に現在未収録の講演原稿をも用いた。引用や参照箇所の指示に際しては、以下の略号を用い、頁数をあわせて表記する。

- GA 2 *Sein und Zeit* (1927)
- GA20 *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs* (1925)
- GA21 *Logik. Die Frage nach der Wahrheit* (1925/26)
- GA22 *Die Grundbegriffe der antiken Philosophie* (1926)
- GA23 *Geschichte der Philosophie von Thomas von Aquin bis Kant* (1926/27)
- GA24 *Die Grundprobleme der Phänomenologie* (1927)
- GA26 *Metaphysische Anfangsgänge der Logik im Ausgang von Leibniz* (1928)
- GA27 *Einleitung in die Philosophie* (1928/29)
- GA64 *Der Begriff der Zeit* (1924)
- Ka Wilhelm Diltheys Forschungsarbeit und der gegenwärtige Kampf um eine historische Weltanschauung, 10 Vorträge

(Gehalten in Kassel vom 16. IV -21. IV .1925), in : *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 8, Vandenhoeck & Ruprecht, 1992-93. (1925)

著作名に続く最後の丸括弧内の数字は、公刊年、講義年、講演年を表す。

・アリストテレスの著作は、以下の校訂版を用い、適宜アリストテレス全集（Aristotelis Opera, edidit Academia Regia Borussica, Georgius Reimerus, 1831-1870）を参照した。

Aristotelis Ethica Nicomachea, recognovit brevique adnotatione critica instruxit I. Bywater, Oxford, 1894.

Aristotle, De Anima, edited, with Introduction and Commentary by Sir David Ross, Oxford, 1961.

Aristotle's Metaphysics, a revised Text with Introduction and Commentary by W. D. Ross, vols. I , II , Oxford, 1924.

Aristotle's Physics, a revised Text with Introduction and Commentary by W. D. Ross, Oxford, 1936.

- (1) 本稿は、1920年代のハイデガーにおける時間についての現象学的な思惟に即しながら、日常的・伝統的な時間理解を体现している時計とアリストテレスにおける時間論とを検討することで、時間という現象の一端を照明することを主題としている。時間についての現象学的な研究の先駆としては、Husserl, E., *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtsein*, Husserliana Bd., X, M. Nijhoff, 1966があるが、本稿ではフッサールの議論は扱わなかった。ハイデガーによるアリストテレスの時間論の解釈を検討した研究としては、Canter, T., *Heidegger's Understanding of the Aristotelian Concept of Time*, in : *Interrogating the Tradition : Hermeneutics and the History of Philosophy*, State University of New York Press, 2000, pp. 131-157 ; Ellis, J., *Heidegger, Aristotle and Time in Basic Problems* § 19, in : *ibid.*, pp. 159-188などがある。また時間と時計との関係についての研究としては、森一郎「時計と時間」、『東京大学哲学研究室 論集』第11号所収、1993年、71-91頁などを参照されたい。

- (2) ハイデガーは1928年の講義においてこのようにいう。「時計の使用の本質に属しているのは、もし私が時間を読み取れば、私は「何時ですか」とは問わず、「私にはどれくらい時間がありますか [= 私は～するのにどれくらい時間をもっていますか]」と問うことである」(GA26, 260)。こうした時計の時間は、我々が日常生活の仕事や用事のためのいわば〈所有する時間〉という性格をもっている。
- (3) アリストテレスにおける時間についての議論が、史上(西洋哲学史上)はじめての本格的な時間論であることは論を俟たない。しかしアリストテレスの時間の議論が、ハイデガーのいうようにはたして今日まで続く伝統的な時間理解、つまり我々の日常的な時間理解の基礎として機能しているのかについては異論もある。土屋賢二は、アリストテレスの時間理解と現代の哲学の時間理解との断絶を指摘している(土屋賢二「時間概念の原型——プラトンとアリストテレスの時間概念——」、『新・岩波講座 哲学7』所収、岩波書店、1985年、36-67頁)。確かにアリストテレスの時間理解と現代哲学の時間理解との間には、基本的な図式や概念についての差異も多く認められる。第四節以下の本文でみるように、ハイデガーの議論は、アリストテレスによる時間の理解を「今」を基準した時間の理解として解釈する。すなわちアリストテレスは「時間」を論じていながら、実は時計に目をやるときに把握される「時刻」に即して時間を理解しているというのだ。そしてハイデガーはこのようなアリストテレスの時間理解(の解釈)に焦点を合わせ、このような時間理解の構造に今日まで続く時間理解の継続性を解釈しているのである。
- (4) ハイデガーは1924年の講演「時間の概念」において、アリストテレスの当該箇所を引用しつつ、時間はアリストテレスによって既に自然の在り方の根本様式との関係においてみられていたこと、また時間それ自身は運動せず、何らかの仕方運動とともに振る舞うものであることと解釈している(GA64, 109)。
- (5) Vgl. *Aristotle's Physics books III and IV*, Translated with Notes by E. Hussey, Oxford, 1983, pp. xxxviii, 151f. アリストテレスは『自然学』Δ巻や『形而上学』M、N巻において述べているように、数を魂や事物から独立して存在するものとは捉えない。それゆえ時間は事物の運動に依拠しているものとして理解されるのである。
- (6) Vgl. *Aristotle's Physics books III and IV*, Translated with Notes by E. Hussey, Oxford, 1983, pp. 152-157; Owen, G. E. L., *Aristotle on Time*, in: *Logic, Science, and Dialectic, Collected Papers in Greek Philosophy*, Cornell University Press, 1986, pp. 296-309; Coope, U., *Time for Aristotle: Physics IV.10-14*, Oxford, 2005, pp. 113-139.
- (7) アリストテレスにおける時間の実在性に関しては、古代のアレクサンドロス・アフロディシ阿斯やシンプリキオス以来、様々な議論がある。近年では以下のようなアリストテレス研究者による註釈や解釈(*Aristotle's Physics books III and IV*, Translated with Notes by E. Hussey, Oxford, 1983, pp. 172-173; Sorabji, R., *Time, Creation and the Continuum*, Cornell University Press, 1983, pp. 7-16, 46-51; Coope, U., *Time for Aristotle: Physics IV.10-14*, Oxford, 2005, pp. 159-177; 松浦和也「アリストテレスにおける時間の実在性」、『哲学』第60号所収、日本哲学会、2009年、249-262頁; 松浦和也「アリストテレスにおける“ὁ ποτε ὄν”」、『Studia Classica』創刊号所収、SC 西洋古代文化研究会、2010年、121-139頁)の他、ハイデガーによる解釈(GA24, 358f.)など様々な解釈が存在する。また、この世界の事物の運動に定位するアリストテレスの時間論は、彼に先立つゼノンらエレア学派における事物の運動否定論を批判的に視野に入れつつ展開されており、その意味で両者は密接な関係にある。ただし本稿では紙幅上、これらの問題についての立ち入った検討は行わない。
- (8) ハイデガーにおける時間のについての議論に関しては、ハイデガー研究者によって多数の研究がなされている。紙幅上、これらの研究を詳しく検討することはできないが、Kisiel, T., *The Genesis of Heidegger's Being and Time*, University of California Press, 1995, pp. 315-361; Thomä, D., *Die Zeit des selbst und die Zeit danach, Zur Kritik der Textgeschichte Martin Heideggers 1910-1976*, Suhrkamp, 1990, S. 144-161は、ハイデガーの時間論の生成過程を追った研究である。またRichardson, W., *Heidegger. Through Phenomenology to Thought*, Fordham University Press, 2003, pp. 85-90は、『存在と時間』の議論を中心に

考察している。ハイデガーの時間論のより立ち入った研究としては、Pöggeler, O., *Neue Wege mit Heidegger*, Karl Alber, 1992, S. 63-72, 115-141 ; Pöggeler, O., *Heidegger in seiner Zeit*, Wilhelm Fink, 1999, S. 39-55を参照されたい。

- (9) しかし現存するアリストテレスの著作のうちには、時間を時計との関係において論じた箇所はない。ハイデガーは1927年の講義において、「より前とより後とに關しての運動の数」というアリストテレスの時間の規定を、機械式時計の運動（運針）を一例に出しながら解釈しようと試みている（vgl. GA24, 327-369）。
- (10) 周知のように、ハイデガーは「存在（Sein）」を自らの思惟の主題として問い続けた哲学者である。彼が未完の主著『存在と時間』で示した存在論の構想——「普遍的な現象学的存在論」（GA2, 51）——によれば、現存在とは存在者との関わり合いのうちで「存在」という現象を理解している特別な存在者である。それゆえ存在論の根拠はこのように「存在了解」している現存在にあり、その分析が存在論の始点となる。このような現存在の存在構造の分析は、まず存在了解する現存在それ自身の存在性格を時間性（Zeitlichkeit）の諸様態において露わにし、さらにそこから存在一般の時間的性格（テンポラリテート: Temporalität）の諸様態を照明するはずであった。だが結局、こうしたテンポラリテートについては、『存在と時間』でもその後の思惟でも明確に論じられることはなかった。従って本来ならば、時計やアリストテレスにみられる時間とテンポラリテートとしての時間との関連が、本稿のような時間の考察において中心に論じられるべきであったろう。『存在と時間』は最終的に、テンポラリテートという時

間の分析を踏まえて、アリストテレスの時間論（と存在論）を批判的に解体する構想をもっていたのである（GA2, 53）。

- (11) 無論、このような時間理解の差異とは、〈客観的時間〉と〈主観的時間〉との差異、あるいは〈物理的時間〉と〈心理的時間〉との差異ではない。リクールは『時間と物語』の日本語版への序文において、アリストテレスの時間論をアウグスティヌスの魂の時間論に対する「時間の宇宙論」として、またハイデガーの時間論を現代の「時間の宇宙論」である「現代物理学」に対する「時間の現象学」として捉えている（ポール・リクール『時間と物語 I』、久米博訳、新曜社、1987年、ii 頁）。しかし厳密に言えば、アリストテレスにおいても、またハイデガーにおいても、時間は物理的時間－心理的時間という図式において議論されることはない。こうした時間の二元的区別の図式とその解消の志向については、伊東俊太郎「存在の時間と意識の時間」、『東京大学公開講座 31 時間』所収、東京大学出版会、1980年、3-42頁も参照されたい。
- (12) 中島義道『時間を哲学する——過去はどこへ行ったのか』、講談社、1996年、38頁。
- (13) クラウス・ヘルト「数としての時間——古代ギリシアの時間理解に見られる現象学的特性——」、『現象学の最前線——古代ギリシア哲学・政治・世界と文化——』所収、内山勝利・齋藤慶典訳、晃洋書房、1994年、39-54頁。またハイデガーによるアリストテレスの時間論の解釈に対する古代ギリシア哲学研究者からの批判としては、土屋賢二「ハイデガーのアリストテレス解釈——アリストテレスの時間論をめぐる——」、『実存主義』第69号所収、1974年、26-37頁などを参照。

